

立正大学 史料編纂室の

vol.02

第2号 2016年1月

中川 壽之 氏 (中央大学広報室大学史資料課)

「大学史づくりの経験から —中央大学百年史編纂事業を振り返って見て今思うこと」

【第2回立正大学史料編纂室主催講習会・講演要旨】

2015 (平成 27) 年 5 月 22 日、立正大学品川キャンパスにおいて第2回立正大学史料編纂室主催講習会が開催されました。当日は他大学からも含めて 20 名の方にご参加いただきました。今回は中央大学広報室大学史資料課の中川壽之氏をお招きし、中央大学における大学史編纂の経験について講演していただきました。以下に中川氏の講演要旨を掲載します。なお、詳細な講演記録が『立正大学史紀要』第1号 (2016年3月刊行予定) に掲載される予定ですので興味をお持ちの方は併せてご覧ください。

1. はじめに

私が籍を置いております大学史資料課は 2015 (平成 27) 年 4 月 1 日にスタートしたばかりの課です。それより前は、35 年間、大学史編纂課と申しておりました。私はこの大学史編纂課で 34 年間、業務に携わって参りました。本日は中央大学百年史編纂事業について、今振り返って見て思うことを述べさせていただきます。

2. 大学史に関する組織について

中央大学の大学史の組織は、委員会としては理事長の諮問機関として「史料委員会」がおおもとにありました。この史料委員会が百年史編纂の方針を出して「百年史編集委員会」が発足しました。



実際の活動の主体は、小委員会である「史料委員会専門委員会」と「百年史編集委員会専門委員会」が担いました。これらの委員会の事務は「大学史編纂課」が所管しました。

この大学史編纂課 (以下、編纂課) は、1980 (昭和 55) 年に広報部の一課として設置されますが、その前年に理事長室記念事業課から広報部広報課に校史資料業務を移管したことを起点としています。これは中央大学の多摩移転後のことで、1985 (昭和 60) 年が中央大学創立百周年にあたることから、移転を契機にその準備にとりかかったものと思われます。

3. 資料の整理について

中央大学の百年史以前の年史については、前身である 1885 (明治 18) 年の英吉利法律学校創設後、二〇年史を刊行し、以後五〇年史まで 10 年おきに刊行され、1955 (昭和 30) 年には七〇年史ができました。しかし七〇年史以降は編纂が行われず、百年史までに 30 年の空白がありました。さらに戦前には 3 回の火災により創立以来の文書・記録類の多くを失いました。この状況を百年史編集委員会専門委員会は「0からのスタート」と呼びました。

私が大学院生のアルバイトとして最初に携わった作業は、駿河台の学生会館の地下倉庫に残されていた資料を、多摩キャンパスに移して整理するというものでした。

編纂課では、その資料群を中央大学文書の「学生会館倉庫」とし、資料整理封筒に表題や年月日、差出・受取などを記入して整理を進めました。具体的には、委員の先生方や自分たちが関わっていた自治体史で行われていた整理方法を準用し、旧家の古文書を取り扱う要領で、資料全部を保存すべきものと考え、選別評価はしませんでした。その背景には、駿河台当時の学内文書の情報がなかったため、この資料は貴重であるという前提があったからです。

また編纂課では、学生会館倉庫の文書整理以来、学内の部課室から文書の「移管」を行っています。それは中央大学の「文書保存規程」に則っていたかということ、実態はそうとは言い難いものです。文書や記録管理といったことからすれば、普通は原局に文書目録があって、現用から非現用となった文書や記録が資料ファイルデータ

とともに移されてくるはずですが。ところが、私が中央大学でこれまで経験してきた文書移管の多くは、実際にはファイル綴じであったり、バラバラであったりと、結局1点1点を確認して目録を作成しなければならぬ資料がほとんどでした。このように部課室から編纂課に移ってきた文書という意味で「移管」としてはいますが、むしろ「収集」に近い資料の受け入れであったように思います。

4. 中央大学の百年史編纂について

百年史編纂事業が始まったとき「0からのスタート」ということで、創立期以降の資料については、学外に求めました。東京都公文書館、国立公文書館、東京大学の百年史編集室などに協力をお願いして資料調査収集に努めました。

その成果を百年史本編の基礎資料とすべく『中央大学史資料集』として順次翻刻刊行しました。その中の一部は、『図説中央大学』にも活用しました。この『図説中央大学』は百年史で予定されていた写真集として創立百周年記念式典に併せてつくったものです。

そのほか資料調査収集を学内外にアピールするため『中央大学百年史編集ニュース』を発行して資料収集の協力をお願いしました。また、古書店などを通じて草創期の講義録などの収集に努めました。

さらに収集した資料の中から保存のため燻蒸作業、修復作業などをこれまで実施してきました。現在、貴重資料約5,500点を1985（昭和60）年から24時間温湿度管理ができる収蔵庫で保管しています。

このような資料調査収集や刊行物などの発行を進め、中央大学百年史の刊行計画案が策定されたのは1989（平成元）年のことでした。当時の計画では、1989年度から資料編、統計年表編、通史編の編集方針を同時に検討し始め、1992（平成4）年度から統計年表編→資料編→通史編という順に刊行し1995（平成7）年度に終了するというものでした。この計画案が示された1989年度には、『中央大学史紀要』も発行され、通史編執筆を前提とした研究論考と資料紹介等が掲載されていくことになりました。

百年史本編は実際にはいつ完成したかといいますが、通史編上巻2001（平成13）年・下巻2003（平成15）年、年表・索引編が2004（平成16）年、そして資料編が2005（平成17）年となりました。刊行計画から10年遅れということになります。これは、基礎資料の調査収集と資料化に時間がかかり、実際に通史編の執筆に相当の時間を費やしたためです。

こうして中央大学百年史全4巻の完結後、編纂課では、百年史編纂以前の年史、史料委員会・百年史編集委員会、編纂課の資料収集活動、そして集積された資料を中央大学の文化遺産として継承するために行ってきた諸施設要望などの記録を『中央大学百年史編纂の記録』（2007（平成19）年）にまとめて百年史編纂事業に終止符を打ちました。

その一方で、中央大学では創立125周年記念事業がスタートしました。編纂課では記念事業の一環として卒業生向けの広報誌に連載した「タイムトラベル中大百年」という記事をもとに、125話からなる『タイムトラベル中大125』という冊子を作りました。また、記念展示も2010（平成22）年の創立125周年記念式典に併せて開催しました。



講習会の様子（第6会議室）

さらに中央大学の創立125周年の事業計画の1つとして多摩キャンパスに21世紀館（仮称）という複合施設をつくり、その中に歴史館（仮称）を開設するという構想が出て、編纂課は歴史館（仮称）開設準備委員会の事務を所管することになりました。しかしその建設計画は、現在見直しとなっています。

そのような中で、編纂課は、百年史編纂事業の過程で蓄積されてきた資料を単に一私立大学固有のものとするのではなく、歴史資源として広く社会に公開していくことを使命とし、法人の広報室の一課すなわち大学史資料課となって新たにスタートしたわけです。

5. おわりに

私立大学においては年史編纂事業と大学アーカイブが往々にして混然一体とならざるを得ない状況にあると思います。大学内においてアーカイブ組織と年史編纂事業の組織がそれぞれ独立し、分業体制がとられ、アーカイブに保存された大学の歴史資料が年史編纂の部署で利用されるというのが、一番理想的でしょう。

しかし、これまでの時代状況からしても実際にはアーカイブが先行して組織化されるのではなく、年史編纂事業にともなってアーカイブが意識化、実体化されてきたと思います。中央大学の場合、これまで述べてきたとおり、百年史編纂事業を通じて学内文書の収集整理、大学アーカイブが実践されてきました。その有様は必ずしも文書保存規程に則ったものではなく、中には百年史編纂事業の過程で、ここでこの文書を受け入れなければ、廃棄されてしまうという思いから収集されたものもあったと言えるでしょう。

百年史編纂事業を終えた大学史編纂課が大学史資料課に衣替えしたのは、組織として1つのあるべき方向であり、これからさらなる整理と選別評価が始まっていくでしょう。実際、大学史資料課のスタートにあたり、新たに「大学史資料の収集および保存に関する基準」を制定し、運用が始まっています。ただし、これは大学史資料課からのものであって、文書保存規程との整合性、選別評価の基準、原局との関係をどう構築していくかについては、これからの全学的な課題であろうと思います。

仮に今後、年史編纂事業と大学アーカイブを同時に行う必要があるとすれば、学内文書の収集は、例えば理事会資料を扱う法人の総務部、教学系であれば学長や学部長会議資料を扱う部課室など、つまり大学運営の意思決定に関わる部課室にターゲットを絞

り、それらとのやりとりを通じて学内アーカイブを形作るのが、年史編纂事業や大学アーカイブ事業を展開する上で有益かと思いません。

年史編纂事業が本格化し、締め切りとの格闘を経て、実体として本編の刊行物ができると、本当に安心します。しかし年史に深く関われば関わるほど、成果物に対する愛着と安堵感から、年史編纂事業で様々な刊行物をつくるのが自己目的化してしまうことがあります。それらを何のためにつくったのか、そのことを忘れてしまうのです。

中央大学の百年史編纂事業が終わり、成果物を目の前にして実感することは、これらはすべてコミュニケーションのためのコンテンツなのであり、ツールであるということです。年史編纂事業を通じて資料と対話し、さらに人と人との対話を可能とするため、成果物が存在するのだということを改めて思い知りました。

1990年代以降、コンピュータ技術の急速な革新によって、あら

ゆるものがつながりつつあります。そのような時代にあって、百年史編纂事業の成果物も、単発、単体の刊行物というのではなく、コミュニケーションのコンテンツとして、インターネットの世界での知的資源・歴史資源として広く社会に情報発信できる環境が整いつつあります。

資料や成果物の切り口を変えることで、それ自体が放つ価値の方向性を広げる。それが可能な時代に我々はいるのだということ認識すべきではないでしょうか。

このことを念頭に置き、年史編纂事業や大学アーカイブにおいて自分たちが関わった知的資源・歴史資源をどう社会に向けて発信していくのか。歴史系の人材はもちろんのことですが、これからの時代には情報処理やその設計に長けた人材が必要不可欠になっていくと思います。歴史もまたデザインされる情報であるという認識に立ち、年史のあるべき姿を考えなければならないと思います。

(文責：立正大学史料編纂室専門員 野崎 要)

■ 谷山ヶ丘の学び舎から

立正大学史料編纂室専門委員（本学経済学部准教授） 平 伊佐雄

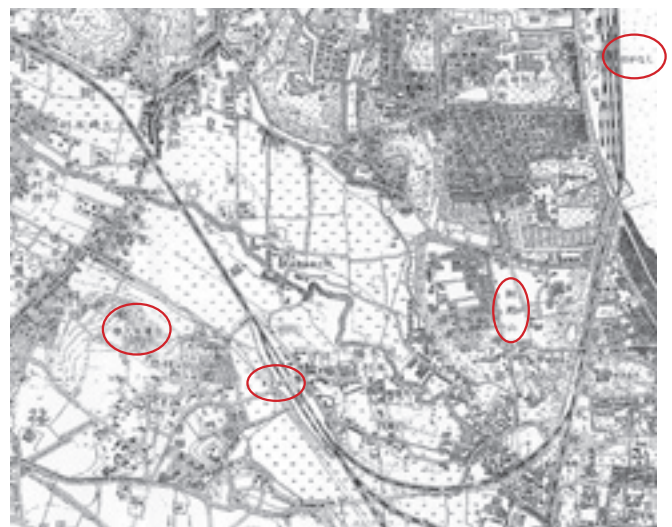
立正大学が現在の品川区大崎四丁目の地に学び舎を構えてから、既に1世紀が過ぎた。周知のように、立正大学の淵源は千葉県匝瑳市^{そうさ}の「飯高檀林」に遡るが、開校の起点としては、1872（明治5）年の東京芝二本榎の小教院にもとめられる。その後、小教院をはじめとする日蓮宗の教育機関の改革・改正が検討される中、また、諸施設が火災にみまわれるという不幸な事情が重なったこともあり、ここ大崎の地に移転して、専門学校令による認可を受けた日蓮宗大学林として、1904（明治37）年に開林したのである。所在は、東京府下荏原郡大崎村大字谷山字嶺原である。当時を偲ぶ人たちの記述には、「谷山」あるいは「谷山ヶ丘」の文言がたびたび登場するが、それは、この「谷山ヶ丘」が、その名の通り丘陵であって、坂を上ってやっと辿り着く校舎や生活の拠点としての寄宿舎のイメージのみならず、ここからの眺望が現在とはかなり異なり、この地になにかしらの愛着を持っていたからであると推察される。

本稿では先人の回顧録をたよりに、当時の日蓮宗大学林（1907（明治40）年に日蓮宗大学に名称変更）と大崎界限の様子を紹介してゆきたい。それらの記述からは、大学林の様子だけでなく、当時の社会情勢や明治時代以降のこの地の変容をも見て取れるからである。

1928（昭和3）年に発行された『吾等の大學』という冊子に境野正、河邊治六両氏による寄稿があり、当時の先生方のなんともほのぼのとした登帰校の様子を垣間見させてくれる。その記述の一部を引用、紹介することから始めたい。

「この頃の學校の名稱は、日蓮宗大學林といふのであつた。それは數年経つた後、林の一字は削り去られた。學校の環境とても其當時を知らぬ人には想像もつかぬほど寂しいものであつた。大學

のある臺地向ふの御殿山一帶の間の凹地は一面の田圃で、三四の農家が其間に點在してゐるばかり、春は蓮華や菜の花の原であつた—これが私には非常に喜びであつた—學校裏の校外住宅とても十指を屈するに足らぬほどであつた。總て今の人家の浪であるのと比較すると眞に桑浪の變である。」[境野正「創立二十五年に際しての回顧と希望」『吾等の大學』昭和3年、p.30]「當時の教員室は、今の東門の附近にあつて隣地の大竹林に面してゐた。學校の歸りに隣の孟宗藪から筍を買つてぶらさげて行かれた先生もあつたやうに記憶する。私もその一人であつたことを告白する。その頃の山手線には、汽車が約三十分一回位運轉していたが、電車はまだ開通して居らず、大崎驛はあつたが、五反田驛はなか



「大日本帝國陸地測量部 一万分の一 品川」 1909（明治42）年測図



日蓮宗大学林校舎全景 1904 (明治 37) 年

つた。品川驛で汽車に乗り後れると八ツ山を越えて學林まで徒歩したものである。八ツ山と谷山との間は全部水田であつて蛇の多い畔道より外になかつた。市電で通う人は東憚寺前で降りて猿町の坂を越えて来たものであつた。〔河邊治六「二十數年前を回顧して」『吾等の大學』、p.47〕

日本鉄道品川線の大崎駅が開設されたのは、1901 (明治 34) 年のことであり、五反田駅が開設される 1911 (明治 44) 年 10 月までは、大學林に至るための最寄り駅は、開林より数年前に設けられたこの大崎駅のみであった。ちなみに、日本鉄道品川線は 1906 (明治 39) 年に国有化され、管轄官庁である鉄道院の発足後、1909 (明治 42) 年に山手線という名称がこの路線に付けられた。山手線と言ってもこの頃はまだ環状線ではない時代である。1909 (明治 42) 年測図の大日本帝国陸地測量部による一万分の一の地形図を見ると、当時の環境をより理解しやすいだろう。もちろん、この頃はまだ現在の東急池上線の大崎広小路駅、五反田駅は存在しない。

両先生の回顧録に対して、学生の目線からの叙述が『立正大生活』という冊子におさめられている。それは、久保田正文氏が一中学生として通った思い出を記したもので、ここからも当時の校舎周辺の様子を見て取れる。1911 (明治 44) 年の春のことを回顧した記録である。引用すると、「その頃の正門は、今の高等学校の正門の方向、今は公道となつてしまつているあたりであつた。五反田の駅は、まだ、開設されていなかったので、山手線を利用する人々は、大崎駅から登校したものである。門への道は、杉木立の坂道で、右手に赤煉瓦作りの製水所が見えた。杉の葉と赤煉瓦とが、美しい色の配合をなして、英語のリーダーに出てくる絵のようであつた。山手線は、始めは、電車でなく、旧式な機関車にひかれたちいさな汽車であつた。(中略) 谷山ヶ丘から、東、北、西を見渡すと、御殿山、池田山から目黒に至る横山が、美しい景観をなしていた。一学期の始め頃には、未だ、田植えも始まらぬ田圃の向こうに、桜花が、霞のようにたなびいていた。二学期の始め頃には、田圃は、すっかり青田となつているが、時々、大水が出て橋が流失し、土地の青年団や消防団員が出勤して、通行人を渡し舟で対岸へ運んでくれたりした。(中略) いつの間にか、五

反田駅が開設せられ、汽車は無くなり、電車も二台連結から三台となり、間隔もずつとちぢまって来た。こうして次第に開けて来たこの田舎も、次第に都会化して来て、学校の帰りに、おみやげとして筍をぶら下げたお歩きになるのんびりした先生方の姿も見られないようになった。〔久保田正文「谷山の思い出」野村耀昌編『立正大生活』1953 年、pp.84-85〕

久保田氏の記述は、当時の先生方が筍をお土産にしていたことを証する史料でもあり、かつ、今では想像もつかない大崎の様子、通行人や学生の青年団とのふれあいなどを知る貴重な手がかりである。さらに、変わりゆく大崎界隈の姿も知ることができる。

さて、最後に紹介したいのは、「大崎大學林參觀記」として北林雪仙氏によって紹介された記事である。おそらく、これは谷山の学び舎についての最古の叙述であろう。1904 (明治 37) 年の『日宗新報』に掲載されたものである。北林氏の大學林參觀記は、大輸送中の山手線不通の状況に遭遇して、品川で汽車を降り、八ツ山を超え御殿山を横断し、大崎街道から左に折れた畦道を経て、坂を登り、開林したばかりの日蓮宗大學林を訪ねたところから始まる、大學林の様子を記した貴重な記録である。二階の寢室から見える風景、田圃を隔て御殿山を正面に見て取れ、その一望の下を汽車が通る様子を絶景と記している。学内については、教室の様子のみならず、課外活動も見学して詳細に報告され、多くの情報を提供してくれている。そして、時代を感じさせてくれる記述は最後の部分、品川駅でのエピソードである。

「……早や品川に出た、出征軍人が今出發といふところで停車場は上を下への大混雑、樂隊が急調のマーチを奏し藝妓の一隊が旗を揮て萬歳、やがて車が動き出すとアーチの電燈が一時に光を増し、八ツ山下のかまりが天を焦がす、ドッと起こる萬歳の聲、天地振動! あとの列車がきたのも知らず、茫然として残る煙をみつめてゐる老爺、桃色の手巾に面を掩てベンチに泣崩れてゐる束髪、水兵服を着たお芥子が旗を揮てトッチャン萬歳、僕はたまたま客車の窓を閉じた」〔『日宗新報』革新第 310 輯 明治 37 年 5 月 11 日発行〕1904 (明治 37) 年は、日露戦争の開始の年なのである。

本稿では、大学のエピソードを探ってきたが、残された史料をみても、人々の生活の目線は、もとより一点に据え置かれているものではなく、社会全体との関係の中から定められているものであることを教えてくれる。

歴史を顧みるとき、大きな事件や法制度、学校に関して言えば、創設者や学長名、有名になった卒業生について知ることはそれほど難しくはない。現代については、新聞記事にエピソードも残されているだろう。しかし、いざ大多数の学生や教員の普段の生活を探ろうとすると、意外にも困難に直面する。大学史料編纂室では、今後、当時のことを垣間見ることができる生の史料も収集してゆくことが必要になるだろう。そこに記された出来事は、大学のひとつのエピソードを教えてくれるのみならず、当時の社会を一学生、一教員、そして一市民の目線から知ることができる貴重な手がかりとなるからである。

